第3号ふ頭再開発の沿革

港湾関連三賞受賞の舞台となる第3号ふ頭の歴史は大変興味深いものがあります。

大正12年に運河が完成してまもなく、現在の第3号ふ頭基部に横浜港の大さん橋のような大型旅客船専用桟橋が計画され人流の拠点にすることが考えられました。

一方、物流については、手宮厩町の海岸前面に二つの大型ふ頭を整備する計画でしたが、結果的に現在の位置に第1号ふ頭（現港町ふ頭）から第3号ふ頭までの三つのふ頭を整備する計画に変更となりました（図1）。

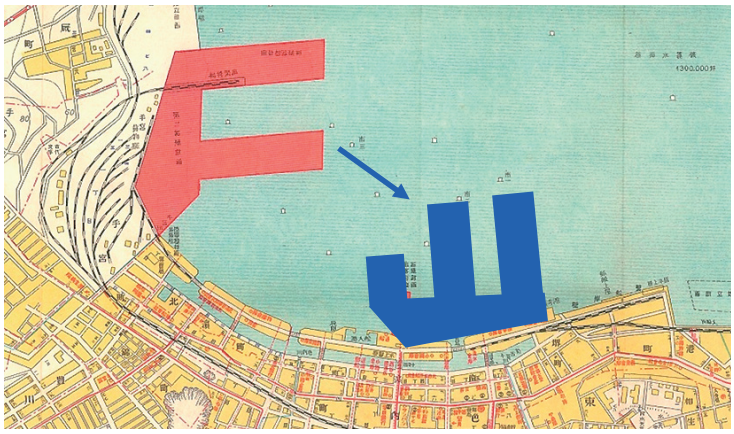

図1 変更となった整備する埠頭の位置

第3号ふ頭が完成したのは昭和29年。当時、貿易の稼ぎ頭であったインチ材の積み出しふ頭として大きな期待のなかで供用開始されましたが、公共上屋などの整備が進まず、インチ材が野積みで風雨にさらされている状態が問題になりました。そのような中、第3号ふ頭が、昭和33年の北海道大博覧会の海の小樽会場となったことからパビリオンとして利用する倉庫や上屋の整備が一気に進むことになりました。博覧会は100万人の目標を上回る160万人が訪れ、事業収支も黒字と大成功を収めました（写真1）。

写真1 北海道大博覧会 海の小樽会場(昭和33年)

昭和30年代に入ると日本は高度経済成長期を迎え、経済規模の拡大に伴い港湾整備も早急な対策が求められるようになります。小樽港では第3号ふ頭を船舶大型化に対応するため延長工事が着手され、昭和42年に完成しました。完成間もない延長部分を利用して開催されたのが第1回おたる潮まつりです。

第3号ふ頭ではインチ材輸出のほか、ロシア（旧ソビエト）から飼料原料となる穀物やニュージーランドからマトン・ラム肉の輸入などが行われました（写真2）。

写真2 インチ材積み出し

一方、取扱い貨物の減少傾向が続くなか、ロシアの貨客船や日本・欧米の旅客船の寄港が増加するようになり、中心市街地に近い特性から、第3号ふ頭を人流の活用に期待する声が再び高まりました。当時、国も港湾整備には物流だけではなく交流や賑わい創出などのウォーターフロント開発を導入する方針を示しはじめ、小樽港では平成元年に「第3号ふ頭と周辺地区に旅客船ターミナルと文化交流施設を中心とした賑わい空間の創造」を目指す案が示されました。しかし同時期に計画された若竹地区の再開発を先行することになり、第3号ふ頭と周辺の再開発は先送りされることになりました。

平成10年代に入ると、小樽港にクルーズ客船の寄港が増え、歓迎の気運が高まりました。市も積極的にクルーズ客船寄港誘致に乗り出し、当所の港湾振興プロジェクトが後押しする形で第3号ふ頭及びふ頭基部周辺の再開発が実現することになりました。

人流の拠点から物流拠点へ、そしてまた人流拠点へと再開発事業が続く第3号ふ頭と周辺ですが、今後は、民間、公共ともに、どのように利用・活用していくかが、賑わいを形成していくための重要な鍵になると考えられます。